青年期女子における情緒的つながりについて(2) : 母親,友人を対象として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4770

青年期女子における情緒的つながりについて（2）
― 母親，友人を対象として ―

山本　純子
臨床心理学専攻研修員・大阪市こども青少年局教育相談

要約
本研究では母親，友人との間で感じられるアタッチメントや，一体感，被受容感などを包括的に捉え「情緒的つながり感」と定義し，イメージ画を用いて，青年期女子における母親および友人との情緒的つながりについて検討した。その結果，母親の円が大きく描かれた場合は，逆に距離が遠くなり，友人の円の方が母親よりも大きく描かれ，友人の存在が大きくなることはなかった。また，母親を理想する場合や受容感を感じている場合は，母親の円が大きくなり，理想としない場合や受容感をあまり感じていなくても，母親の存在の大きさが友人と同等になるだけで，友人より小さくなることはなかった。このことから，青年期においても母親の存在は大きく，友人が母親と同等の存在だと感じているが、友人との情緒的つながりが母親との情緒的つながりに完全に取って代わることはないことが示唆された。つまり，青年期において，母親との密接な関係から友人との密接な関係へ移行するのではなく，母親との密接な関係は続いていることが示唆された。

キー・ワード：青年期女子，イメージ画，母親，chumship

Ⅰ　問題
1. はじめに
様々な発達段階において，母子関係の重要性や母子関係が精神的健康に及ぼす影響力はよく取り上げられる。Erikson（1959/1973）による基本的信頼感や，Bowlby（1969/1991）によるアタッチメント（attachment）もその中の一つである。一方、友人関係の理論としては，Sullivan（1953/1990）の chumship 理論がある。Sullivan（1953/1990）は，前思春期に同性同年輩の友人 chum との親密な関係である chumship の経験が，それ以前の人格の歪みを正常にできるとして，人格発達における重要性を述べている。落合ら（1996）の親子関係を発達的な視点から捉えた“心理的離乳”への 5 段階評価や Blos（1962/1971）の第二の個体化の理論では，母親中心の関係から，友人中心の関係に移っていくとされている。Bowlby（1969/1991）も，子どもが成長するにつれて母子間のアタッチメント関係は，次第にパートナーシップへと変化していくと述べている。

しかし，女子に関しては，「友達みたいな親子」と言われるように，母親世代が娘世代に近づく母娘関係が取り上げられる（矢幡，2000）など，密接な同性の友人との関係だけでなく，密接な母娘関係が青年期以降も持続していることが窺える。

2. 情緒的つながりの側面
そこで筆者（山本，2008）は，実際に母親および友人との関係で感じている多様な感覚について検討するため，アタッチメントだけでなく，理想や親近感なども含む，より多様な感覚を包括的に捉え，これを「情緒的つながり感」として定義し，母親，友人それぞれとの「情緒的つながり感」がどのようなものであり，どのように関わりあっているのかを検討するため情緒的つながり感尺度を

作成し，質問紙調査を実施した。その結果，母親との情緒的つながり感に関して,「母親による自立の承認」,「理想化された母親への同一化」,「母親との一体感」,「母親による無条件の受容」,「母親への同類視・親近感」の５因子が抽出された。また，友人との情緒的つながり感に関して,「憧れの対象としての友人への同一化」,「友人関係に対する信頼・自信」,「友人との相互受容感」,「友人との仲間意識」,「友人に対する依存」の５因子が抽出された。母親つながり感尺度と友人つながり感尺度の各因子を測定する下位尺度の項目内容を比較したところ，被受容感やそれぞれの対象への同一化といった似通った側面が見られた。しかし，母親との「情緒的つながり感」と友人との「情緒的つながり感」の相関を調べたところ,「母親による無条件の受容」因子と「友人との相互受容感」因子の間に.30 以上の正の相関（r =.348）が見られたのを除き，その他の因子同士では有意な相関ではあっても相関係数の値は.24 未満と低かった。これらのことから，母親，友人それぞれの対象との間で感じている「情緒的つながり感」の関連性は低く，相互に独立している傾向にあることが示唆された。つまり，母親，友人それぞれとの「情緒的つながり感」には似通っていると思われる側面においても，質的な違いがあると言える。

3. 本研究の目的

そこで，本研究では，青年期女子が母親，友人それぞれとの「情緒的つながり感」をどのように感じているのか，また，両者の質的な違いを明らかにするため，イメージ画を用い，そこに表現される相手の存在の大きさと心理的距離に注目して検討することを目的とする。

Ⅱ　方法

1. 調査期間

2006 年７月に質問紙を配布した。

2. 調査対象者

大阪樟蔭女子大学に所属する大学生 157 名（平均年齢 : 20.1 歳，SD =0.93）を対象に調査を行い，記入漏れの質問紙を除いた 149 名を分析の対象とした。

3. 調査方法

質問紙を授業中に一斉に配布し，各自が回答後，所定の回収箱に提出してもらった。

4. 調査内容

1）つながり感尺度

山本（2008）が作成した母親とのつながり感尺度，友人とのつながり感尺度各 37 項目を使用した。回答は,「非常にそう思う」（４点）～「全くそう思わない」（１点）の４件法で求めた。なお，友人とのつながり感尺度に関しては回答者が chumship を形成していることを前提とし，最も親しい同性の友人を思い浮かべて回答してもらうように教示をした。

2）イメージ画

自己イメージを見るために高木（2002）が用いたイメージ画を参考に，母親および友人との心理的な関係性を調べるためのイメージ画を実施した。家族画において，関心のある人物ほど大きく描かれることから，円の大きさは相手の存在の大きさを表すと考えられる。また，動的家族画において，人物間の距離が相手への感情や親密性の度合いが表れるとされていることから，自分の円との距離に相手との心理的距離が表れると考えられる。

手続きとしては,「『自分』の円と同様に，母親および友人のそれぞれを円で表すとしたら，あなたにとって母親及び友人はどこに位置しますか？あるいは，どのように表現できますか？あまり考えずに直感で書いて下さい」と教示し，自分と母親，友人との関係をイメージし円を描いて表してもらった。また，導入に当たっては，円環・矢印・点線などを例示し，用紙はあらかじめ枠を設定しておき，自分を表す円は始めから書き入れたものを使用した。

Ⅲ　結果と考察

1. イメージ画のカテゴリー分析

まず，円の位置について分類し集計を行った。円の位置は，内包・交錯・外接・分離・その他に分類できたが，母親・友人ともにほとんどが分離であったため，本研究での分析には分離しているものを対象とした。円の大きさは，描かれた円の直径を測定し，集計を行った。誤差は5mmとした。自分の円を基点にした距離については，自分の円と母親，あるいは友人の各円とを結んでいる線の長さを測定し，集計を行った。誤差は5mmとした。

そして，母親の円の大きさによって自分の円からの距離に差が見られるのか，3×3のχ^2検定を行ったところ，1%水準で有意な分布の偏りがあった（$\chi^2_{(4)}=26.61$，$p<.01$）。クロス表とχ^2検定，および残差分析の結果を**表1**に示す。残差分析の結果，円の大きさが自分より母親が小さい場合は，母親の円の方が自分に近く，母親が大きい場合は友人の円の方が自分に近く描かれる傾向が明らかにされた。

次に，友人の円の大きさによって自分の円からの距離に差が見られるのか，3×3のχ^2検定を行ったところ，有意な結果は得られなかった（$\chi^2_{(4)}=6.35$，*n.s*.）。

そこで，母親と友人の円の大きさを比較し，円の大きさによって自分の円との距離に差が認められるかどうか，3×3のχ^2検定を行ったところ，1%水準で有意な分布の偏りがあった（$\chi^2_{(4)}=21.45$，$p<.01$）。クロス表とχ^2検定，および残差分析の結果を**表2**に示す。残差分析の結果，円の大きさが母親と友人で同じ場合，母親の円の方が自分に近く描かれ，友人に比べて母親の円が大きい場合，母親の円は友人よりも遠くに描かれる傾向が明らかにされた。

これらのことから，母親の存在が大きいと自分にとって母親の影響が強いと感じているため，心理的距離を取ろうとしているのではないかと考えられる。逆に母親の存在がやや小さく影響力が小さい場合は，母親の方が友人よりも身近に感じていると言えるのではないだろうか。

表 1　母親の円の大きさと距離のクロス表とχ^2検定の結果

母親の円の大きさ	自分の円からの距離					計	χ^2値
	友人の方が近い		母親=友人	母親の方が近い			
自分より小さい	19	↓**	14	44	↑**	77	
母親=自分	10		5	6		21	26.61**
自分より大きい	28	↑**	14	6	↓**	48	
計	57		33	56		146	

（矢印は残差分析結果）　**$p<.01$

表 2　母親と友人の円の大きさと距離のクロス表とχ^2検定の結果

円の大きさ	自分の円からの距離					計	χ^2値
	友人の方が近い		母親=友人	母親の方が近い			
友人の方が大きい	12		10	12		34	
母親=友人	4	↓**	6	23	↑**	33	21.45**
母親の方が大きい	40	↑**	17	21	↓**	78	
計	56		33	56		145	

（矢印は残差分析結果）　**$p<.01$

また，母親の円の大きさによって友人の円の大きさに差が見られるのか，3×3のχ^2検定を行ったところ，1%水準で有意な分布の偏りがあった（$\chi^2_{(4)}$=26.92，p<.01）。クロス表とχ^2検定，および残差分析の結果を**表3**に示す。残差分析の結果，母親の円が自分より大きく描かれる場合は，友人の円も大きく描かれ，母親の円が自分と同じ大きさで描かれる場合は，友人も同じ大きさで描かれ，母親の円が自分より小さく描かれる場合は，友人の円も自分より小さく描かれる傾向が明らかにされた。このことから，自分を基点としたイメージ画として表現する場合，母親および友人，それぞれの対象の存在の大きさ自体には差は感じていないと言える。あるいは，自分の円を基点としてという教示をしたため，自分と母親，自分と友人という二者関係の視点でそれぞれの関係を捉えて表現していた可能性が考えられる。

表3　母親の円の大きさと友人の円の大きさのクロス表とχ^2検定の結果

母親の円の大きさ	友人の円の大きさ						計	χ^2値
	自分より小さい		友人＝自分		自分より大きい			
自分より小さい	69	↑**	5	↓**	4	↓*	78	
母親=自分	9	↓**	9	↑**	3		21	26.92**
自分より大きい	31	↓*	8		10	↑*	49	
合計	109		22		17		148	

（矢印は残差分析結果）　**p<.01　*p<.05

2. つながり感尺度とイメージ画

次に，先行研究（山本，2008）において，母親つながり感尺度と友人つながり感尺度の各因子で，項目内容から似通っている点があると思われた因子同士を比較して，イメージ画に違いが見られるかを調べた。

1）母親，友人への理想・憧れとイメージ画

まず，母親つながり尺度の『理想化された母親への同一化』を中央値（＝2.75）で高低群に分け，母親に対する理想度高群と低群とした。母親に対する理想度の高低によって，円の大きさに差が見られるのか，2×3のχ^2検定を行ったところ，5%水準で分布に有意な偏りがあった（$\chi^2_{(2)}$=6.75，p<.05）。クロス表とχ^2検定，および残差分析の結果を**表4**に示す。残差分析の結果，母親に対する理想度が低いと母親は友人と同じ円の大きさで描かれ，母親に対する理想度が高いと母親の円の方が友人より大きく描かれる傾向が明らかにされた。

表4　母親に対する理想度と円の大きさのクロス表とχ^2検定の結果

母親に対する理想度	円の大きさ				
	友人の方が大きい	母親=友人		母親の方が大きい	
高群	16	10	↓*	45	↑*
低群	19	23	↑*	34	↓*
Pearsonのχ^2値		6.75*			

（矢印は残差分析結果）　*p<.05

同様に，母親に対する理想度の高低によって，各々の円の距離に差が見られるのか，2×3 のχ^2検定を行ったところ，5%水準で有意な分布差があった（$\chi^2_{(2)}$=6.63，p<.05）。クロス表とχ^2検定，および残差分析の結果を**表 5** に示す。残差分析の結果，母親に対する理想度が高いと友人の円の方が自分に近く描かれ，母親に対する理想度が低いと母親の円の方が近く描かれる傾向が明らかにされた。

以上のことから，母親を理想の対象としている場合，友人より母親の円が大きく，友人より遠くなり，母親を理想の対象としない場合は，大きさは友人と変わらないが，逆に友人より距離が近くなることが明らかになった。これは，母親を理想の対象とする場合には，母親の存在が友人よりも大きくなる一方，心理的距離も遠くなることを示しており，理想の対象として見た時，それだけ母親に偉大さを感じ，また自分への影響力を感じているのではないかと考えられる。一方，母親を理想としない場合，母親と友人の存在の大きさが同じ状態になっている。つまり，母親に自分と共通する部分を多く感じていると言え，母親に対して友人のような感覚を持っていると考えられる。さらに，母親を理想としない場合でも，大きさは友人よりも小さくなっていないことから，母親を理想としていないため友人の存在の方が大きくなるのではなく，理想としていない状態であっても，母親は友人と同等の存在の大きさがあると言えるのではないだろうか。母親を理想としない場合に，友人より母親の円の方が近くなるのは，同じ存在の大きさであった時は，母親に親しみを感じているからではないかと思われる。

表5　母親に対する理想高低と距離のクロス表とχ^2検定の結果

	自分の円からの距離				
母親に対する理想度	友人の方が近い		母親=友人	母親の方が近い	
高群	35	↑*	15	21	↓*
低群	22	↓*	18	35	↑*
Pearsonのχ^2値			6.63*		

（矢印は残差分析結果）　*p<.05

次に，友人つながり感尺度の『憧れの対象としての友人への同一化』を中央値（＝3.0）で高低群に分け，友人に対する憧れ度高群と低群とした。そして，友人に対する憧れ度の高低によって円の大きさに差が見られるのか，2×3のχ^2検定を行ったところ有意な分布差は見られなかった（$\chi^2_{(2)}$=1.23，*n.s*.）。さらに各々の円の距離においても憧れ度によって差が見られるのか，2×3のχ^2検定を行ったところ有意な分布差は見られなかった（$\chi^2_{(2)}$=.87，*n.s*.）。母親を理想とすることと，友人に憧れを持つことは同じことのように思われたが，友人に対する憧れ度とイメージ画の分析の結果，有意な差が見られなかったのは，それぞれの感覚が異なっていたためだと言える。友人を憧れの対象として同一化しようとする時，母親に対しての場合に比べて，友人の方が近づきやすい，つまり同一化しやすいのではないだろうか。そのため，友人を憧れの対象としていても，していなくても，友人の存在の大きさや心理的距離は影響を受けなかったと考えられる。

2）母親と友人による受容度とイメージ画

『母親による無条件の受容』を中央値（＝2.88）で高低群に分け，母親による受容度高群と低群とした。まず母親による受容度の高低によって，イメージ画の円の大きさに差が見られるか，2×3のχ^2検定を行ったところ，1%水準で有意な分布差

が見られた（$\chi^2_{(2)}$=10.59，p<.01）。クロス表とχ^2検定，および残差分析の結果を**表6**に示す。残差分析の結果，母親による受容度が高いと，母親と友人の円が同じ大きさに描かれずに母親の円の方が大きく描かれ，反対に母親による受容度が低いと母親の円が友人より大きく描かれずに両者の円が同じ大きさに描かれる傾向が明らかにされた。

次に，母親による受容感の高低によって，各々の円の距離に差が見られるか，2×3のχ^2検定を行ったところ，1%水準で有意な分布差が見られた（$\chi^2_{(2)}$=13.35，p<.01）。クロス表とχ^2検定，および残差分析の結果を**表7**に示す。残差分析の結果，母親による受容度が高いと，母親が近くなることは少なく，友人の方が近くなることが多かった。また，母親による受容度が低いと，友人の方が近くなることは少なく，母親が近くなることが多かった。

以上をまとめると，母親による受容度が高いと，友人に比べ母親の円の方が大きく描かれるが友人の円の方が近く描かれ，反対に母親による受容度が低いと，母親と友人の円は同じ大きさで描かれ，母親の円の方が近く描かれることが明らかにされた。これは，母親による受容度が高い場合は，友人より母親の存在が大きいことを示していると言える。ありのままを受け入れられていると感じる状態では，友人より母親の存在が大きくなると言える。しかし，友人より遠くに描かれることが多く，母親の存在が大きいことから，遠くに感じていても受け入れられているという安心感が得られているためだと考えられる。また，母親による受容度が低い場合に，母親，友人の円の大きさは同じであることから，母親による受容度が低いと母親と友人は同じ存在の大きさとなると言える。しかし，存在の大きさは同じでも母親の方が近くなっており，友人よりは母親に受容されたいため，こちらから心理的距離を縮めているのではないかと考えられる。

表6　母親による受容高低と円の大きさのクロス表とχ^2検定の結果

	円の大きさ				
母親による受容	友人の方が大きい	母親=友人		母親の方が大きい	
高群	16	9	↓**	48	↑**
低群	18	24	↑**	31	↓**
Pearsonのχ^2値	10.59 **				

（矢印は残差分析結果）　**p<.01

表7　母親による受容高低と距離のクロス表とχ^2検定の結果

	自分の円からの距離				
母親による受容	友人の方が近い		母親=友人	母親の方が近い	
高群	37	↑**	18	17	↓**
低群	20	↓**	15	38	↑**
Pearsonのχ^2値	13.35 **				

（矢印は残差分析結果）　**p<.01

次に，『友人との相互受容感』を中央値（＝3.25）で高低群に分け，友人による受容度の高群と低群とした。友人による受容の高低が円の大きさ，各々の円の距離に差が見られるか，それぞれ2×3のχ^2検定を行ったところ，どちらも有意な分布差は見られなかった（$\chi^2_{(2)}$=.43，1.78　*n. s*）。このことから，友人による受容度に差があっても，イメージ画に影響は与えないことが明らかとなった。母親による「受容」は，どんな自分であっても受け入れられているという無条件での受容だが，友人による「受容」は，相互に受けとめ合い，支えあうという受容である。そのため，相手が受けとめられないと判断すると，受容感は得られないという違いがある。母親にどんな自分でも見せられ，それを受け入れられていると感じている人達は，受容度が高く，母親の存在は大きくなると言える。また，幼児期にそのような経験があると，現在受容度が低い人でも，母親の存在は友人より小さな存在になることはないと言えるのではないか。

3. まとめ

本研究では，母親の円が大きく描かれたときは，逆に距離が遠くなり，また，友人の円の方が母親よりも大きく描かれ，友人の存在が大きくなることはないという結果になった。このことから，青年期になっても母親の存在は大きく，友人が母親と同等の存在だと感じているが，友人との情緒的つながりが母親との情緒的つながりに完全に取って代わることはないことが示唆された。その一方で，母親の存在の大きさゆえに，心理的距離を取るという関わり方をしていることが示唆された。

また，母親を理想する場合や受容感を感じている場合は，母親の円が大きくなり，理想としない場合や受容感をあまり感じていなくても，母親の存在の大きさが友人と同等になるだけで，友人より小さくなることはなかったと言える。このことから，イメージ画は友人の影響よりも，今までの母親との関係のあり方や現在の母親との関係など，母親の影響が大きく関わることが明らかとなった。つまり，青年期においても母親の存在は大きく，母親との密接な関係から友人との密接な関係へ移行するのではなく，母親との密接な関係は続いていると推測される。

4. 今後の課題

本研究では青年期女子を対象に調査を行ったが，発達段階によって母親，友人との関係が変化することから，縦断的に見ていくことが必要だと思われる。また，本研究では主に円の大きさと距離に注目して検討を行った。しかし，実際のイメージ画では，さらに線の太さといった形状でつながりの程度を各自が表現していると考えられるものもあった。今後はイメージ画とともに，インタビューを取り入れることで，母親，友人との情緒的つながりをどのように捉えているのかを深く検討できるのではないかと思われる。

＜付記＞　本論文は，平成18年度大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻修士論文を抜粋しまとめなおしたものである。修士論文をまとめるにあたり，大阪樟蔭女子大学大学院の奥田亮先生にご指導とご助言を賜りました。この場を借りて心から感謝致します。

文献

Blos P（1962）：*On adolescence：a psychoanalytic interpretation*. New York：Free Press．野沢栄司（訳）（1971）：青年期の精神医学　誠心書房

Bowlby J（1969）：*Attachment and loss, Vol.1 Attachment*. London：Hogarth P.：Institute of Psycho-Analysis．黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子（訳）（1991）：母子関係の理論Ⅰ　愛着行動　岩崎学術出版社

Erikson EH（1959）：*Identity and the life cycle*. New York：International University Press 小此木啓吾（訳）（1973）：自我同一性－アイデンティティとライフ・サイクル　誠信書房

落合良行・佐藤有耕（1996）：親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析　教育心理学研究，44(1)，11-22.

Sullivan HS（1953）: *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. New York:Norton. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑪幹八郎（訳）(1990) : 精神医学は対人関係論である　みすず書房

高木綾 (2002) : 青年期におけることなる自己像とその関係性イメージについて―いわゆる「本当の自分」と「借り物の自分」の観点から　心理臨床学研究，20⑸，488-500.

矢幡洋（2000）：強すぎる母－娘関係に生じる問題　児童心理，54(1)，28-33.

山本純子（2008）：青年期女子における情緒的つながりについて―母親，友人を対象として―大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター　研究紀要，2，43 - 53.